

---

# フルアーマー・クロスドレス

夢一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フルアーマー ・ クロスドレス

### 【Nコード】

N1219Y

### 【作者名】

夢一

### 【あらすじ】

呪いによって男物の服が身につけられなくなった少女のような少年マモリの、呪いを解くための冒険。

魔法でいろんな衣装に変身！恥ずかしいけど最強の魔法！

## 1・英雄の息子マモリ

> i 3 4 0 7 3 — 4 3 2 0 <

15年前、世界は一度魔物に支配されかけた。だが一人の男が命をかけてそれを阻止した。

男は最強の魔法『フルアーマー』を駆使し、邪神アスモデウスを倒した。

世界に平和がおとずれた。

そして現在…

2

> 小王国・スタートロイ<

「きゃー！！！！」

きぬを裂くようなありきたりな悲鳴が小さな城下町に響く。

街中をいつものように歩いていたその女性は、突然空から現れた人でも動物でもない生き物に驚いた。

「ババロンだ！」

「またか！最近多いな！」

「と、とにかくあの娘を助けないと!」

近くにいた大の大人たちがしどろもどろになりながら空から現れた存在を威嚇する。

ババロンと呼ばれたそれは、さながらプテラノドンのような姿をしていた。

大の男より一回り大きく  
槍のように尖った口と牙。

翼には羽毛などはなく、薄い皮だけ。

足には鋭い鍵爪。

プテラノドンと違うのは、翼の他にも人間のような手が生えていることだ。

これが近頃スタートロイの街を騒がせてる魔物である。

「早くしないとあの娘が!」

魔物に立ち向かうのに躊躇する大の大人たち。

そこに…

「…まあ待ちなよ」

ピンク色セミロングの髪をなびかせ、余裕の笑みを見せながらいかにもケンカに弱そうな線の細い少年が男たちの前に出た。

無地のTシャツにハーフパンツ。少年さながらのその格好でババロンを見据える。

「おお!マモリ!」

「マモリちゃん!」

「いいところに来てくれた！」

「いつものあれ頼むよ！」

「わかってるよ！…待っててよ、そこのお姉さん！」

言うなり少年は生身のままババロンに向かって駆けていった。

「フルアーマー・真空剣！！」

そう叫んだ、いや、唱えたマモリの姿は、一瞬緑色に輝いた。

次の瞬間には胸元から肩にかけて贅沢な装飾のあしらわれた強そうな鎧。

肩からはマント。

マモリは西洋の甲冑を豪華にしたよな鎧を身に纏ってさらに勢いを増してババロンに突っ込んでいく。

そしてその手にはさっきまでなかったはずの大剣が握られていた。

「ギギッ！」

危険を察知したババロンはすぐに女性を諦め飛び立った。

「逃がさないよ！次またいつ襲いに来るかわからないからな！」

マモリはその手の剣を大きく振り上げ…

「ハーーーー！！！」

振りおろした。

ビュウウウン

降り下ろされた剣から真空波が生じ、直線軌道でそのままババロンの体を真つ二つにしてしまった。

切断されたババロンの体はそのまま森の方へ落ちていく。

「…ふう」

「おおおお！」

「やったー！さすがマモリ！」

「風の剣だ！かっこいい！！」

「いやあ…最強の魔法フルアーマー、いつ見てもゾクゾクするな」

「あの変身つぶりもすごいけど、すごいのはやっぱりあの武器と鎧さ！」

「ああ！英雄ゼウが残した天下無双の武具だからな！」

「いやいや…それをああして自在に操るマモリが結局一番凄いんだって！」

当人のマモリを差し置いて勝手に盛り上がる一部始終を見ていた街人たち。

マモリはそんな光景に慣れっこだった。

「マモリ…ありがとう。」

「え！？いや、いいよそんなの！」

お礼を言う女性に対して照れ隠しで答えるマモリ。

「それより怪我とかない？」

「ええ、大丈夫よ。お陰様で。それより本当にすごい魔法ね。世界中のどんな装備でも使いこなせちゃうんでしょ？伝説の武器だって…」

「うん。ていつても父さんが魔法と一緒に残してくれたやつだけだけどね。」

「それでも十分よ。マモリは十分すぎるくらいこの街と私たちを守ってくれてるわ。」

「やめてよ!…照れる。」

さっきまでの自信はどこにいったのか、真っ赤になるマモリ。

英雄ゼウ、マモリの父の活躍により世界が魔物に支配される危機は去った。

だがまだ魔物は統制を失っただけで、人の驚異としては存在しつづけている。

マモリは父から授かった魔法『フルアーマー』の力で微弱ながらもこの国を守る立場にあった。

「やはりここじゃったか…フルアーマーの魔法…」

褒められ喜ぶマモリと、またそれを見て嬉しくなる街の人々。

そんな光景を上空から見届け、不適に笑う影があることに、まだ誰も気付いていなかった。

## 2・フルアーマー

<スタートロイ…町はずれ>

「ただいまー」

マモリは昼間の騒動を終えて町はずれの家に帰ってきた。とたんにドタドタと騒がしい音が鳴り始める。

「おつかえりマモリーー！！！」

マモリと同じピンク色の長い髪の女性がに勢いよく抱きついてきた。

「ちよっ、くつつかないでよ母さん！」

「ええ！なんでよー。こんなに可愛い息子が帰ってきたらまずハグしてあげなくっちゃ！」

「もう俺16だよ？恥ずかしいって…」

「いいじゃん！誰も見てないんだから。キスもしてあげようか？」

「絶対やめて！」

彼女はマモリの母、アイリ。

英雄ゼウが死んだ後もマモリを女手一つで育ててきたアイリは、マモリのことを誰よりも可愛がり、愛していた。

アイリとマモリはスタートロイの城下町から少し離れた丘の上に住んでいるのだ。

「聞いたわよ？また魔物を倒して街の人助けたんだって？」

「はやっ！ついさっきの話なんだけど…」

「母さんにはなんでもわかるのよん。」

アイリはとて16歳の子がいるとは思えないと、街の人からもよく言われている。

だが実はもう30を過ぎていたのだが、見た目は20代後半、性格は20代前半といった感じだった。

「まさか…俺のこと盗撮するような魔法使っていないだろうな…？」

「…それいいわね。」

「おい！」

「うそうそ。そんな魔法知らないから。」

アイリは魔法使いとしても有能な方で、マモリに魔力の操作などを教えたのも彼女だった。

「でもフルアーマーの魔法、だいぶ使えるようになってきたわね。」

「まあね。まあ父さんのくれた装備がすごいだけけど。」

「それでも魔法自体をコントロールしないと、装備召喚もできないんだからね？」

「わかってるよ。だからまだ呼び出せない装備もたくさんあるんだ。」

「

『フルアーマー』の魔法は、亜空間にしまつてある武器や防具を一瞬のうち呼び出して装備することのできる魔法である。装備召喚には魔力が必要だが、一度装備してしまえばどんな代物でも自在に操ることができる。

強力な魔法剣や特殊なもの…伝説といわれるものでも操れてしまうのが、この魔法が最強といわれる所以だった。

そしてこの魔法が使えるのも世界中でマモリだけなのだ。

「それに気をつけなさいよ？あなたの持つてる武器や防具を狙ってる悪い奴だつてたくさんいるんだから。」

「大丈夫だよ。そういう武器ヲタなやつらに強いのはいないからね。」

「なんでそんなこと言い切れるのよ……」

マモリとアイリはそのまま家の奥に入り、アイリは夕飯の用意を始めた。

<スタートロイ…城下町…上空>

「ふむ…あの少年を追うのは簡単じゃが、それでは少し芸がないのう……」

先ほどマモリを空から見ていた黒いローブの老人は考えていた。

そこに1匹のババロンが飛んできた。

近隣の森にはババロンが多数生息しており、スタートロイの人々の脅威となっている。

「下等手族か…まあこいつでもいいわい。」

そついいながら老人は右手をババロンの前に突き出した。

するとババロンの体はまるで後ろから引っ張られるようになり動きが止まる。

今度は左手を森の方向に向け、何かを引っ張るようにして自分の胸元にゆっくり引き寄せた。

直後、森が大きなざわめきに包まれ、たくさんのババロンが上空に飛び出した。

そのままたくさんのババロンは老人の目の前のババロンへと飛んできた。

いや、飛んできたのではなく引き寄せられてきたのだった。

「…魔獣合成…」

老人の眼の前でババロンたちは歪に混じり合い、大きくなる。

そこから粘土のように手足、翼、頭が現れる。

「ギギアアアアアアアア!!!」

ビルのように大きな姿になったババロンは、そのまま城下町に降りて行った。

### 3・巨大ババロン

<スタートロイ…マモリの家>

「…母さん、今何か凄い音しなかった？」

「ん〜…ドラゴンでも暴れてるんじゃないの？」

アイリは夕飯の用意をしながらマモリを適当にあしらった。

「この辺にドラゴンはいないだろ…」

マモリは腑に落ちないと感じつつも、とりあえず気にしないようにした。

「それよりマモリ〜、ちょっと卵買ってきてよ！」

手はなせないからと言うようにマモリに頼む。ずっと2人暮らしをしているため、こういう時のお使いくらいはマモリにとって当たり前だった。

「わかった。ちょっと待ってて！」

マモリはそういいながらパツと準備して家を出た。

「……うわああ……！！！」

突然大きな声をあげるマモリにアイリも駆けつける。

「マモリ！どうしたの!？」

そこには見たことない大きさのババロンの姿があり、今にも街を襲わんとしていた。

「何あれ!？」

「ババロンだよ!あんな大きさ…見たことないけど…。俺行っていく

る！」  
信じられない巨大さのババロンに驚きつつも、マモリは急いで街の方に走った。

「マモリ！母さんも行くわ！」

異常事態だと確信したのか、アイリもマモリを追って街に向かった。

「母さん…危ないから家にいなよ！」

「何言ってるの？私だって魔法使いとしては有能な方なのよ！」

「知ってるけど…！」

<スタートロイ…城下町>

突如として現れた巨大ババロンにより、街はパニックになっていた。王国兵士を筆頭に戦える者は前に出て巨大ババロンを攻撃している。巨大ババロンも大きな傷はつかないものの、動きづらいようだ。

「なんて大きさだ…」

「怯むな！足を狙え！」

「戦えない者は早く城の中に！」

「魔法が使える者は動きを止めてくれ！」

小王国スタートロイは、近隣そう強い魔物もおらず、貴重な資源もない小さな国だった。

それゆえ戦争などに巻き込まれることもなく、長年平和を維持していた。

だからこのような大型の魔物など相手は不慣れなのだ。

上空からその様子を見る黒ローブの老人。

「ふえふえふえ…町が危ないぞ…フルアーマーの少年よ…早く助けにこんか…」

そしてまたあの魔法を見せてくれ。」

<スタートロイ城>

「ええい！どうにかならんのか!?!」

そう吠えているのはこの小王国を統治する痩せた体に髭をはやした男、スタートロイ王だ。

「国民のほとんどは場内に避難しました。ですがあの魔物自体はどうしようも…」

「この国の戦力はあのような大型の魔物に対応していませんから…」

「言われんでもわかっておるわ!…それでもどうにかせんと国が滅ぶだろう!」

「しかし…」

「…あのフルアーマーの少年…マモリが来れば…!」  
常に王のそばで知恵を貸しているはずの大臣も今回は弱気だった。マモリはこの国で最も強い力をもっている。そのため国の人間はどうしてもマモリを頼りにしてしまう。

「バカ者！一人の少年に頼るな！ここはおまえたちの国でもあるんだぞ!?!?」

<スタートロイ…城下町>

> i 3 4 1 2 5 — 4 3 2 0 <

マモリたちが巨大ババロンの足元についたとき、兵士や街の人たちは傷だらけになりながら城に逃げて行くところだった。

「母さん！俺は空から一気にやるから足元で注意を引いて！」

「わかったわ」

巨大ババロンも2人の存在に気付いたようで、その大きな翼を羽ばたかせ、地面を蹴った。

強い突風が起き、2人はよろける。

「く…フルアーマー・滅竜剣！」

マモリが呪文を唱えると、今度は黄色に輝き、先刻の鎧とは別の鎧を身につけた。

全身に爪のような装飾、紫に輝くその鎧はどんな衝撃にも耐えれそ  
うだ。

一番の特徴は、ドラゴンのような翼がついていたことだった。  
剣は巨大なのこぎりのような形をしている。

マモリはその背中の翼で空に向かう巨大ババロンを追いかけた。

巨大ババロンは追ってくるマモリを迎撃しようと、手を大きく振り  
下ろす。

それをぎりぎりのところでかわすマモリ。

「アローレイ!!!マモリ!気をつけて!」

アイリは自分の息子に攻撃が当たらないように魔法の矢を打った。光の矢がまっすぐ空中の巨大ババロンに向かっていく。

アイリのの打った矢は見事に巨大ババロンの目をとらえた。

「ギアア!」

巨大ババロンは体制を崩して高度を下げた。

そのままマモリはその巨体を抜き去り、頭の上で剣を構える。

「ハアアアア!」

マモリは剣を構えたまま急降下し、巨大ババロンの首を切り落とすた。

## 4・呪われたマモリ

<暗い部屋>

スタートロイから数百キロの地点。とある場所のとある部屋。部屋を暗くし、ベッドの中で話す男女。

「あのジジイ、大丈夫かしら？」

「心配ないさ。ああ見えても呪術師としては一流だし、頭もきれる。ただ心配なのは…変態だつてことだ。」

「ふふ、アレス様だつて…変態ですものね。」

? 燭の灯に照らされて、2人は唇を合わせる。

「あの力だけは…放っておけんからな…」

<スタートロイ…城下町>

首を切られた巨大バロンは、地面に落ちるかと思ったら黒い泡のようになつて消えていった。

「これは…作られた命だつたのね…」

アイリはこの魔法に知っているように、こぼした。

「母さん、知ってるの？」

マモリはすでにフルアーマーを解除していた。

「ええ、これは黒魔法よ。きつとこのあたりのババロン全てを合成させたんだと思う…。」

「そんな…誰がそんなことを!!!?」

「は〜可愛い顔してすごい力を持っているのう…。」

2人の会話に割って入ってきたのは逃げ遅れた様子のおじいさんだった。

「な!大丈夫ですか!?!」

怪我をしているらしく、動けないようだった。マモリはすぐに駆けつける。

そこに母アイリが声を上げる。

「マモリ!待って!!!」

「え?」

母の声を聞いたときマモリはその老人に肩を貸そうとするところだった。

「ほほほ、ありがとう。お嬢ちゃん。」

マモリのことをお嬢ちゃんと呼んだその老人は、マモリの腕をつかみブツブツと聞こえない声で何かを囁きだす。

「おじいちゃん…俺男なんだけど…。」

「マモリ!離れてっ!!!」

…ドクン!!!

心臓が跳ね上がるような感覚をマモリは感じた。

そう感じた瞬間、マモリの来ていた服が全て弾けとび、マモリは全

裸になってしまった。

「…え？」

訳がわからないといった顔をするマモリ。

老人はあつけにとられるマモリを置き去りにして杖に乗り宙に浮いた。

「うまくいったわい。呪いは直接体に触れなければかけられんからの」

さっきまでの弱々しい雰囲気とは別人のようになったその老人は、マモリに呪いをかけたことを告げる。

「呪い…？」

「そうじゃ…フルアーマーの魔導師よ。貴様の中に眠るゼウの武具。それらを全て使えなくする呪いじゃよ。」

「え…？」

マモリは信じられないことを言われ、理解するのに時間がかかっていた。

マモリにとってフルアーマーの魔法とその武器や防具は父の形見でもあったため、その衝撃は大きかった。

「貴様は気づいていたみたいだな。女よ…」

老人はカイリの方に意識を向け、細い目をさらに細める。

「…今この街でマモリの存在や魔法を知らない人はいないのよ。それにあなたからはまだ魔力が感じられるわ。さっきの巨大ババロンもあなたの仕業ね？」

アイリは最初から違和感を感じていながらも、息子のマモリをみすみす老人に近づけてしまった悔しさにいらだっていた。

「その通りじゃよ。まああれはフルアーマーの力を見るための余興にすぎん。」

「余興？あんなことしておいて…よくもそんな！」

「ふふ…今はそんなこと言ってる場合かろう？」

そう言われてアイリははっとしたようにマモリのもとに駆け寄る。

「…マモリ？」

「フルアーマー・真空剣！」

その呪文でマモリは一瞬緑色に輝く。しかし輝きがおさまってもマモリは全裸のままだった。

「フルアーマー・滅龍剣！」

さつきと同様体は光る。しかし鎧を装備することはできなかった。

「フルアーマー・破邪の槍！」

魔除けの武器を召喚しようとしても結果は同じ。

「…そんな…」

茫然とするマモリ。

「…どういうこと！？フルアーマーはあの人がマモリに与えた絶対魔法のはずよ。呪いなんかでどうにかなるわけがないわ！！」

アイリも信じられないというように、またマモリの気持ちを代弁するよつに、老人を問いただす。

「わしの呪術をもってすれば、いくら英雄ゼウの魔法であろうと呪える…と言いたいところじゃが、それは無理じゃ。なのでその少年自身を呪わせてもらった。」

「マモリを…？どういうこと…!?!？」

「ふふふ…それはの…男物を装備できなくなる呪いじゃよ。今あのフルアーマーで呼び出せる強力な武具のすべては英雄ゼウのものであるう？ゼウは男…しからばその装備は全て男物ということになるであろう？」

老人の言葉はまるで変質者のようで、不気味な笑いが混ざっていた。

その言葉にあっけにとられるアイリ。

「…なにそれ？じゃあマモリは男の子の服が着れなくなっちゃったの!?!？」

それは間違いなく、わが子のかつてないピンチだった。

「そついうことじゃ。」

「そんな…変態かよおまえー!」

さっきまで全裸で呆然としていたはずのマモリが大きな声をあげる。悔しさよりもありえなさに対するつつこみのようだった。

「変態じゃ。」

「返せよ！魔法も装備も全部父さんの形見なんだぞ!?!？」  
後から悔しさが増してきたのか、涙目になっている。

「別に奪ったわけではないぞ。魔法も装備もお主の中に残っておるからのう。」

「う…じゃあこれから一生…冬でも全裸で過…せ…て…い…う…の…か…よ…！」

「わしも鬼じゃないからのっ…そうならずに取り計らってやったんじゃない。」

「…は？」

それがどういう意味かもわかっていながら、信じたくないという気持ちで問い詰めてしまう。

「女子の物なら着れるということじゃ。…これからは少女として生きていくがよい。フルアーマー…ゼウの子よ」

突きつけられた現実には、マモリはショックを隠しきれなかった。

## 5・スタートロイ城

「それでは失礼するぞ。目的は果たしたからの…」  
「待て!!」

そう言つて老人は杖に乗つたまま空高くまで上昇して行つた。  
マモリの声に反応することなく、すでに次の仕事を頭に思い浮かべているようだった。

「…マモリ…」  
自分の息子の将来について真剣に対策を考えながら、アイリはマモリに声をかけた。  
しかしマモリはうつむいて立ち尽くしたままだ。

「…ふう………まあいいじゃない!男の子の服が着れなくなっただけでしょ?だったら女の子の服着て過ごせばいいのよ!…母さんはいいわよ。ていうかマモリは可愛いから、前から女の子の服を着せたいなつて思つてたのよ。これからは娘として…ね?」

気楽な性分の母はすでに楽しみになつている。その想いとマモリを慰めたい想いがごっちゃんになつている。

「…親としてそれでいいの…?」  
母の変わり身の早さにあっけにとられるマモリ。  
気を取り直し、近くにあった布切れを体に巻きつけてアイリと一緒に城に向かう。

<スタートロイ城>

巨大ババロンに襲われ多くの人が怪我をし、国民全員が城の中に集まっていた。

だがもともと結束の強い国で、傷ついた人たちの手当ても早く、すでに活力を取り戻していた。

城内では大臣たちが各所に指示し、壊れた家の建て直しや今後の対策など迅速な動きを見せている。

マモリも巻きつけた布を揺らせながらアイリと一緒に城の門をくぐった。

そこで待っていたのは、国の王子と数人の兵士だった。

「あら、ジード王子！」

アイリが王子に挨拶をする。とても王族と一般人とは思えないラフな挨拶で。

そついうラフさがまかり通るのも、この国の良さだった。

ジード王子はスタートロイ唯一の王家の跡取り。

現在は25歳で国のために早く結婚相手を見つけると父にうるさく言われている。

「お怪我はありませんか？」

「ええ…大丈夫よん」

ジードは隣のみすばらしい少女のような少年の顔を見て、それがマモリだと気づく。

「マモリ！どうしたんだ、その格好は…!？」

ジードとマモリは小さいからよく一緒に遊ぶ兄弟のような関係だった。  
というのも、英雄の家族としてマモリとアイリはよく城に招待されることが多かったからだ。  
いつも鎧姿で活躍するマモリをよく知っているため、布切れ1枚のマモリの姿には驚いた。

「ああ…後で話すよ。それより街の人は？」

「それなら大したことはない。死人も出ていないしな。おまえのおかげだ。」

「それはよかったわ。ところでジード王子…国王様にお目通り願える？」

アイリは相変わらずの笑顔で国王への面会を要求する。

とてもさつきまで大型の魔物と戦っていたとは思えない。

「それはかまいませんが…」

「ちよ、母さん！」

「マモリもずっとそんな格好じゃいられないでしょ？」

そう言っただけでアイリは一国の王子を早くといわんばかりに引っ張って行った。

<国王の間>

スタートロイ王は難しい顔をして窓からさつきまで巨大ババロンが暴れていた場所を見つめている。

「…この国も…もっと…」

物思いにふけるのを遮るように、勢いよく扉が開く。

「失礼します、父上！アイリ・マモリの両名をお連れしました。」  
「入りたまえ」

3人が室内に入る。もちろんマモリは布切れを巻きつけたまま。

「マモリ…また国を守ってもらったな。…いつもすまない…兵士でもないお前に…」  
王という立場も気にせず、スタートロイ王は少年に頭を下げる。

「いいよそんなの…それより…」  
言いかけてマモリは言葉を詰まらせた。顔も真っ赤になっている。それを見たジードが心配そうに顔を伺う。

「…どうしたのだ？…その格好…」

続きを話し出したのはアイリだった。最もアイリもそのつもりで王様の前に来たのだが。

「実はうちのマモリなんですけどね？ちょっと呪いにかけてしまったんです。」  
と、それほど深刻なことでもないような言い方でぶっちゃけるアイリ。

「なんと！」  
「呪い！？」

「まあ一応報告しておきますと、さっきのババロンは呪術師の仕業だったんですよ。黒魔法でこの近辺のババロンを合成させたものだ

ったようです。」

「ということは、その呪術師がマモリを？その呪術師は？」

「逃げられました。でももう来ないと思いますよ。目的は果たしたって言うていたし…まあその目的がマモリを呪うことだったみたいですけど。」

国王もジードも、事態を想像しながらアイリの報告を真剣に聞いていた。

マモリは相変わらず赤くなっただままだ。

「まあ…ご想像通りだと思いますが、フルアーマーの魔法を狙ってたみたいなんですよね。」

「…うむ、だがあの魔法は取り出すことも呪うこともできないはずの絶対魔法だろう？」

「ええ、だから呪われたのはマモリ自身なんです。…その…男の子の服が着れない呪いをかけられちゃって！」

マモリは耳まで真っ赤になった。

「なんと…それでゼウの鎧が着れなくなったということか…」

「そうですね。まあそういうわけなんで、国王様にはマモリの服を用意してもらいたくって。女の子の服を。」

「ええ！？母さん！！」

まさかここでというように、マモリは声を上げた。

「だってしょうがないでしょう？このままずっと布だけで生きていくの？」

「それは…」

「マモリ…」

ジードは複雑だった。ジードは以前からマモリの可愛さに想うところがあったからだ。

マモリのピンク色の髪、白い肌、重厚な鎧を着こなすのが信じられないほどの細い体。

それはその辺の街娘よりもずっと可愛らしいのではと思いつけていたのだった。

もっとも、そう思っているのは、ジード以外にも何人もいるわけだが。

「わかった。では20着ほど服を用意させよう。下着もな。」

「ありがとうございます。」

「…ちょっと待ってください！」

特に動揺もなく事態を飲み込んでしまったどころか、下着まで用意すると言つ国王の発言に焦り、マモリも打って出る。

マモリはもともと一生布だけで生きていくつもりも、一生女の子の格好で生きていくつもりもなかった。

まあ中身は年頃の少年なのだから当然である。

「どうしたの、マモリ？ やっぱり女の子の服は嫌…？」

「そうじゃなくて…ってそりゃ嫌だし恥ずかしいけど…そういうことじゃなくて…」

「？…じゃあ何？」

「この呪いを解くとか…そういう方向性はないのかよ！？」

マモリはなぜみんなあっさり受け入れるのかずっと疑問だったため、ついにその問いを投げかけたのだった。

「それは難しいわね。呪いっていうのはね、術者にもリスクがかかる危険なものなの。その分強力な魔力が込められていてね。呪いをかけた本人にしか解けないようになってるのよ。」

「そんな…」

まあなんとなくそんな気はしていたマモリだが、今は小さな希望が打ち砕かれた思いだった。

「ま、諦めて娘になっちゃいなさいよ。母さん、マモリなら絶世の美女になると思うけどな。」

ジードが内心で激しく同意する。

「やめてくれよ！…だったら…あのじいさんを探す！」  
もうマモリに残された道はそれしかなかった。

マモリにとって女の子としての生活なんてありえない。

「何言ってるのよ…どこに行ったかもわからないでしょ？」

「そうだけど…このままなんて嫌だよ！それにあのじいさんが飛んでいった方向はちゃんと見てたんだから！」

アイリは自分の息子を娘にすることにためらいがない様子だが、マモリも引くわけにはいかない。

「それはだめだ！マモリはこの国にいないと！！」

そう言ったのはジードだった。

「なんでだよ。俺が強い力を持つてるからか？でももうそれが使えなくなっただぞ！？」

ジードはもちろんそういつつもりで言ったのではなかったのだが、マモリにはその気持ちは伝わるはずがない。

## 6・初めての女装

マモリの強い要求に、一同は戸惑っていた。

その理由はマモリと離れたくない、危険にさらしたくない、この国を守ってほしいという想いの他にもあったからだ。

アイリと国王の目が交差する。

そしてアイリはため息をつき、マモリの方に向きなおった。

「やっぱり…どうしようもない運命なのかもね…マモリ」

「は？」

まるでこうなることがわかっていたように、アイリはマモリに微笑みかけた。

「国王様…この子とお別れの時が来たみたいです。」  
いつになく真剣な表情になるアイリ。

「…そのようだな…。国としても、これ以上マモリに負担をかけま  
いと体勢を整えていたところだ。…いい時期かもしれんな。」  
国王も同様に真剣な表情でマモリを見つめる。

「私も…用意はできています。」

「おいジード、この2人…何の話をしてるんだ…？」  
勝手に話を勧める母親と国王についていけず、ジードに助けを求め  
る。

だがジードにも訳がわからない会話だった。

「さあ…それよりマモリ！まさかこの国を出るつもりじゃないだろ

うな!!?」

「あのじいさんがもつと遠いところに行ったんだ。俺も行くよ。俺、ずっと女の格好なんて嫌だもん。」

「…マモリ…」

マモリが遠くに行ってしまう。それだけはマモリの言葉からも国王たちの会話からも理解できた。

ジードの言葉を遮ったのは国王だった。

「誰か!宝物庫の奥のあれを持って参れ!」

続いてアイリも、穏やかな顔でマモリの前に立つ。

「マモリ…これでフルアーマーの魔法を使いなさい。」

そういつてアイリは左手に魔力をこめ、空間に小さな穴を作る。その中に右手をいれ、開いた空間から一本の剣を取り出した。

「これは守護の剣…聖剣イージス。お父さんが私とあなたを守るようにくれた剣よ。」

「父さんが…?」

「さあ…この剣でフルアーマーの魔法を使いなさい。」

「…でも…フルアーマーは…」

そう言われてアイリはマモリが父の装備しか使ったことがないのを感じていた。

「大丈夫よ。フルアーマーの武器と防具はセットなの。知ってるでしょ?新しい武器を手にしてフルアーマーを使えば、その武器に合った服や鎧が精製されるわ。」

「そう…だったんだ。」

「マモリは今男の服が着れない呪いにかかっているから、精製されるのは女の子の服だと思うけどね。」  
アイリはまたいつもの笑顔で、でも少し淋しそうに言う。

「…てことは、これでフルアーマー使ったらどんな格好になるかわからないってことか…。恥ずかしいのや、変なものになったら嫌だな…」  
フルアーマーの知らなかった機能は理解して、こんどは不安が大きくなる。

「大丈夫よ！ずっと母さんが持ってた剣なんだから。きっと凄く可愛い衣装が出るわよ！」  
もはや鎧ではなく衣装と言い出す母。

「マモリ、母さんの愛と…父さんの魔法を信じなさい」  
マモリの両肩をポンと叩き、今までにないくらい笑顔を見せる。

「……わかった。」  
そう言っただけマモリは魔力を手の内にある聖剣イージスに込め始める。腹をくくったようだ。

「フルアーマー……イージス！」  
マモリの体が七色に輝き出し、纏っていた布切れが宙を舞い、マモリの体が新しい素材に包まれていく。  
やがてマモリから発せられていた光が消えていく。

光りが消え、そこに立っていたのは紛れもなく美少女だった。  
肩と胸には鎧と言える金属アーマーがついているが、丸みを帯びて可愛いデザイン。

その下ではスクール水着のような藍色の布が腰のくびれを強調している。  
淡いスカイブルーのスカートはプリーツ状になっており、太ももの半分の位置で布がなくなっていた。  
さらに下には黒のニーソックス。その絶対領域はマモリが男とわかっていても、ドキドキさせるのに十分だった。

> i 3 4 1 9 5 — 4 3 2 0 <

一瞬その場が沈黙する。

「……!!」

マモリは下を見て自分の格好を見てとても恥ずかしくなり、母や国王に背を向けてしやがみこんだ。

ミニスカートなどはいたこともないのだから、普通にしやがめばスカートの中が見えてしまうことなどわかるはずもない。

運悪くその先にはジードが立っていた。

「……!!」

スカートの中を確認するジード。白い生地にレースをあしらった可愛らしいシヨーツ。

そして女の子にはあるはずのない膨らみ。

ジードは溢れ出そうになる鼻血を理性で止める。さすがは一国の跡取り。

「か…か…かか…！」

マモリは後ろの声に一瞬肝が冷えた。

「カワイー！ー！！マモリーー！！」

案の定ハイテンションになった母親が抱きついてくる。

「マモリすごく可愛いわよ！ああ…さすが母さんの娘だわ！」

「娘じゃないから！」

「ねえ！下着はどうなってるの？どんないやらしい下着はいてるのよ！」

「人前でそういうこと聞く！？それでも親か！」

アイリは楽しくてしょうがない。

「それに自分でも見てないんだからわからないよ…！」

「じゃあスカート捲って見てみなさいよ！」

「できるかあ！！！！」

一人スカートの中知っているジードは、何とも言えない優越感に浸っていた。

「オホン」

国王の咳払いで、アイリも我に返り、また真剣な表情に戻る。

すると、扉が開き、大臣が一人入ってくる。

「陛下、あれをお持ちしました。」

「あれ？」

## 7・父の遺品

大臣が持ってきたのは小さな箱だった。中心に大きな宝石が埋め込まれており、そこから四方に溝が掘られている。

「うむ。それをマモリに。」

大臣はマモリの姿に少し驚いたようだったが、その件には触れず、静かにマモリに箱を渡した。

マモリはその箱を持った瞬間、不思議な感覚にとらわれる。まるでこの中に引きずり困れるような。

でも怖くはない、優しさに満ちた。

この箱を手にするのをずっと待っていたみたいだった。

「マモリ…その箱に魔力を込めて、フルアーマーを唱えなさい。それの名前は…ガメイラよ。」

「ガメイラ…」

マモリはこんな箱でフルアーマーが使えるのかと疑問に思いながら、魔力をこめる。

すると箱の中央の宝石が光だす。

マモリはさっきの感覚を思い出し、フルアーマーを唱えた。

「フルアーマー・ガメイラ！」

箱の宝石がより強く光だし、その光が四方の溝に走る。

箱全体が光、蓋の部分が宝石と一緒に消えていく。

と思つたら勢いよく中から何か飛び出し、マモリの首に巻きついた。その物体は少しずつ形を整えていき、ペンダントの形になってマモリの胸元に落ち着いた。

「…これは？」

「それは人格魔導具、ガメイラ。これからあなたを助けてくれるわ。」

「人格…魔導具…？」

「ええ、今はまだ眠っているみたいだけど、じきに目を覚ますわ。」

「目を覚ま…え…？」

その様子を見て安心したように国王も口を開く。

「それはお主の父が戦いに行くとき、私に預けて行った物だ。もしもマモリがこの国を出て行くことがあれば、渡してほしいと。」

聖剣イージスに続き、またしても父の遺品。マモリは胸元のペンダントを見つめ、さっきの感覚は父の魔力が残っていたのだと思つた。

「それで…これってどういう物なの？」

「ガメイラが目を覚ました時に、きつと教えてくれるわ。ただ一つだけ言っておくと…そのガメイラは知識と記憶の塊のようなもの。」  
そういった母の目には少し涙が溜まっていた。それが珍しかったのか、マモリはどうしていいかわからず、黙ってしまふ。

「マモリよ…すぐに行くのか？」

国王の言葉ではっとする。

「え？ああ…そのつもりだよ？じゃないと追いつけないかもしれないから。」

「な！本気か、マモリ！？外は危険が…」

「ジード！！！！」

慌てる王子様を国王が静止する。

「お前の気持ちもわかる。だがこれも運命なのだ。」

そんな大袈裟な…。

マモリはそう思いながらも回りの事の運びに圧倒されてつつこめな  
かった。

マモリは軽くあの老人を捕まえて、呪いをといてすぐ帰るつもりな  
のだから当然である。

今度は侍女がきらびやかなドレス等、たくさんの服を持って来た。

「持って行くがよい。フルアーマーの魔空間に入れておけばいくら  
でも持っていけるのだろうか？」

「え！…！…！いらぬよ！すぐに戻って来るんだし…！」

「まあいいじゃない。もらっておきなさいよ、マモリ！もし本当に  
要らなくなったら私が貰うから。」

そう言っアアイリは勝手に服を受け取った。

マモリも仕方なくフルアーマーの魔空間を開き、その中に服を入れ  
ていく。

## 8・旅立ち

スタートロイは小さな国。そのため外交を含めてよく国の外に出ることもあった。小さな村や街もある。マモリたちも例外ではない。

だからマモリはいつものようにお使いに行って帰って来るつもりだけのつもりだった。

「まあ…色々もらっちゃったけど、呪い解いたら…すぐ帰ってくるから！」

「…そうね…待ってるわ、マモリ。」  
アイリはまた泣きそうになっていた。

「気をつけてな。」

「マモリ！…私がついてってやるのか？」  
ジードは以前からマモリのことを意識していたが、今のマモリを見て一層離れるのが不安になっていた。

「なんでだよ。すぐ帰ってくるからジードは残って嫁さん探せって！」  
「ぐっ！」

「そうだぞジード。明日には同盟国のメザレーアから姫君が訪れる。お前がおらんでどうする。」

「…わかった。マモリ、すぐに帰ってこいよ！」  
ジードはしぶしぶマモリの出発を了承した。

「じゃあ母さん、俺やっぱり娘になる気もないし、父さんの武器も  
つと使えるようになりたいから…行ってくるよ！」

「ええ…行ってらっしゃい。マモリ…」

こうしてマモリは部屋を、城を、そして国を後にした。  
持てるだけの食糧と、ある程度のお金を持って。

慣れないスカートのまま。

たった一人で…。

「…予言が、当たってしまいましたな。」

「はい、まさかこんな形で…こんなに急に…」

さっきまで堪えていた涙を流し、城の窓から娘の姿をした息子を見  
送るアイリ。

「新しい英雄の誕生となれば良いが…」

「きつと…あの子なら大丈夫です。どんな困難も乗り越えますよ。」

…彼女がついているし、何より…あの子の息子だから…」

## 9・ガメイラ

> i 3 4 3 2 6 | 4 3 2 0 <

<カウロイ村>

スタートロイ王国から少し離れた小さな村。

農業や家畜の飼育が盛んで、スタートロイが統治している。

最近では山賊がよく食料を奪いに来るため、スタートロイの兵士が常駐している。

マモリも作物を買いに、母のアイリと何度か来ていたため、よく知っている村だ。

老人はこの村の方向に来たのを見ていたマモリは、ここで情報を得ようと立ち寄ったのだった。

「あのじいさん、ここにいてくれたらいいんだけどな…。いなくても誰か見たっていた人がいたらいいんだけど…」

「あれ？マモリ君でねか！」

「（ギク！）」

小太りのおじさんがマモリに声をかけた。マモリがカウロイ村に来るたびにお世話になってるおじさんだった。

女装しているため、あまり知ってる人には会いたくないマモリだった。

「どした、そんなめんこい格好して。マモリ君は女の子だったかいな？」

陽気に笑いながらマモリに近づくおじさん。

いつもならその陽気な笑いにとても癒されるのだが、今回は事情が違っていた。

「…どうもおじさん。いつもお世話になってます。」

マモリは苦笑いでその笑顔に応え、挨拶する。

「この格好は…まあいろいろ事情があつて…あんまり触れないでください。」

顔を真っ赤にするマモリ。

「わはは。そんな下ばかり向いてつと、お天とさんに怒られるぞ！似合つてんだからどうどうとしろ！」

おじさんの言葉に少し安心したマモリは、老人のことを聞いてみることにした。

「おじさん、今日は別の用事で来たんです。昨日杖に乗った黒い口ーブのおじいさん、この村に来ませんでしたか？」

「ああ…どうだったかなあ…わからねえや。」

「そうですか…」

ドガ！

何かをぶつけるような大きな音に驚くマモリとおじさん。

その直後にガラの悪そうな大きな声がこだまする。

「オラオラオラー！さっさと食料を出しやがれ！ここの食いものは山賊・バーバリ団のものだろうが！」

マモリとおじさんはすぐにその場に駆け付けた。

そこにはさっき声を上げたリーダー格の長髪の男と数人の乱暴そうな男たちが、村の物を壊してまわっていた。

「おじさん…これは!!?」

「…この辺を荒らしている山賊だ…」

「でも城の兵士がいるはずじゃ…そのおかげで山賊はいなくなったって聞いてたのに!」

「…ああ、なんでも昨日、大きな怪獣が街を壊したらしくって…その復旧で城に戻ってんだ…!」

「(あの巨大ババロンのせいだ…!)」

マモリは兵士不在の訳を知り、それをどこかで聞いたこの山賊たちが戻ってきたんだとわかった。

「…ん?なんだかやけに可愛い娘がいるじゃねえか!あいつは俺の物にしよう…」

長髪の男がマモリに気づき、全身を舐めるように見定めた。

「おい野郎ども!あの娘を捕まえてこい!…」

「へい!…」

マモリに男たちが襲い掛かってくる。

「く…フルアーマー・イージス!」

服だけ残して魔空間にしまっておいた聖剣イージスを召喚する。

イージスを手にするやいなや、マモリは襲いかかる男たちの手を華麗にかわしながら、男たちが持っている武器を次々と壊していく。その動きにマモリ自身も驚いた。

「この剣…すごい!」

「な…なんだこの女…!」

驚く長髪の男。

「女じゃない！俺は…男だ！」

マモリはそのままの勢いで長髪の男に切りかかる。

長髪の男はギリギリその攻撃をかわすが、持っていた武器を手放してしまう。

だが体勢を整え、すぐにマモリに突っ込む。

至近距離で懐の小刀を取り出し、マモリの腕を狙う。

マモリもその攻撃をよけるが、胸元のガメイラに小刀が当たってしまった。

「あ！くそう！！！」

「小娘が…なめるなー！」

「男だつて言ってるだろー！」

お互いが一度後ろに跳び、すぐに切りかかる。

長髪の男の攻撃を前にかわし、マモリは長髪の男の後頭部を柄で強く打った。

長髪の男は気を失い、前のめりに倒れた。

「うわああ…！」

「しかたねえ…ずらかるぞー！」

そう言つて武器を破壊された下っ端たちが、長髪の男を担いで逃げて行った。

「…ふう。」

軽く一仕事終わったというように溜息を吐くマモリ。

「マモリくん、ありがとう！それにしても強えな〜…戦う美少女！勝利の女神様だ！」

おじさんが笑いながらマモリの肩をたたく。

「ちょ…それはやめてよ、おじさん！」

「お姉ちゃんありがとう！」

近くで見ていた少年や少女、村人が次々とお礼を言う。

「だから俺は…はあ、もういいや。」

みんなの笑顔でどうでもよくなった。それにこの場合男と思われた方が変態扱いされるんじゃないかと思うマモリだった。

「へえ…なかなか可愛いわね、マモリちゃん。」

すぐ近くから突然声が聞こえ、マモリは警戒心を強めた。

「…！」

周りを見回してみても声の主らしき人はいない。その声元はあまりにも近すぎた。

「…！…！…！…！」

マモリは母の言葉を思い出す。

…今はまだ眠っているみたいだけど、じきに目を覚ますわ…  
確かにそう言っていた。

マモリは恐る恐るガメイラを見る。

「そうよ！私！ガメイラ！」

その声は確かに胸のペンダントから聞こえていた。

「さつき目が覚めたわ。ここわ…カウロイ村ね。私が起きたってことは…。マモリちゃん？」

「え！？…いや…ええ！！？」

「何驚いてるのよ…。それにしてもマモリちゃん大きくなったわね。」

「え！何言ってるの…？俺のこと知って…：君、なんなの？」

急に馴れ馴れしく話しかけてきたペンダントに戸惑いを隠せない。

「私は人格魔導具のガメイラよ。あなたの旅のサポートをするためにあなたのお父さんゼウに作られたの。その時あなたはまだ小さかったから覚えてないわよね？」

覚えてないどころか、こんな奇妙な存在が家の物だったなんて全く知らなかった。

「私にはこの世界の全てに近い知識が入っているわ。それはきつとこれからのあなたにきつと必要なもの。」

「…どういうこと？」

「…ん？だから、これからあなたが旅をするために私の知識が必要になるだろうってこと。」

「旅って…俺は用事は終わったらすぐに帰るつもりなんだけど…」

「え？」

ガメイラはしばらく黙り、また声を出した。顔も口もないから話し出すタイミングが全く読めない。

「その用事って…その呪いを解くことでしょうか？」

「呪いのこともわかるの！？」

「ええ。あなたは今男の子の服が着れない呪いにかかっている。あなたから魔力をもらって話してるんだから、それくらいわかるわ。その呪いをとくためについてことよね？」

「そう！そういうこと！！」

「…だって私が力を貸してあげる。っていつでもその呪いをかけた張本人を見つげなくちゃだけどね。」

その言葉でマモリは老人を探していることを思い出した。

「そうだよ！あのおじいさんを探さなきゃ！誰か知ってる人…」

「おい、マモリくん！！」

それぞれの作業に戻っていく村人の中、おじさんがまた声をかける。

「さつきはありがうな。兵士さんも明日にはまた戻ってくれるらしいてよ。」

「それは良かった！」

その言葉を聞いてマモリは安心する。

実は自分が村から離れて大丈夫かと心配していたのだ。

「それからな、さつきマモリくんが行っていた杖に乗ったロープのじいさんの事思い出したよ。たしかウォーロッセオの方に飛んでいったぞ。」

「ウォーロッセオ…遠いな。」

「これから作物を届けに行くんだけど、一緒に連れて行ってあげようか？」

おじさんはもともと作物をいろんな場所に届けるような仕事をしていたので、専用のジープを持っている。

ウォーロッセオは歩いて行ったら一週間はかかるような場所だ。

マモリはこれを絶好のチャンスと思い、乗せてもらうことにした。

「ありがとう、おじさん！よろしく頼むよー!!」

「よし!!じゃあ家に行つてジープに乗つてな!すぐ準備すつから」

マモリは行き慣れたおじさんの家に行き、ジープに乗った。

しかし、老人が思っていた以上に遠くに行つており、本当に呪いが解けるのか不安になっていた。

「大丈夫よ。ウォーロッセオに行けば確実に会えるわ。」

ガメイラの言葉には確信があるようだった。

「それにしてもマモリちゃん……」

「…何？」

「美人に育つたわね。」

「やめてよ!!」

そしてマモリを乗せたおじさんのジープは、ウォーロッセオに向けて出発した。

## 10・ウォーロッセオの闘技場で

< 闘技場のある町・ウォーロッセオ >

数百年の歴史を誇る巨大闘技場で有名な町。

今でもその闘技場では毎週何かしらの競技が行われている。

ゆえにこの町には腕に自身のあるもの、闘いが好きな者、またそれを見物したい者がたくさん集まる。

「ありがとう、おじさん！ここでいいよ！」

ウォーロッセオ内の商店街でジープを止める。

「そうけ？まあこんだけ人がいれば誰かそのじいさんを知ってるかもな！」

「うん！ほんと助かった。戻ったらまたおいしい野菜食べさせてね！」

「おう、それじゃ気をつけてな！」

マモリはジープを降り、おじさんと別れた。

「とにかくあのじいさん探さないと…。この町に居てくれるといいけど。」

「大丈夫よ。きっとこの町にいるわ。」

「なんで解るんだよ。」

「女の勘よ！」

女なんだ…。

自身満々に喋る胸元のペンダント・ガメイラに、マモリは相変わらず

ず何からどう突っ込んだらいいのかわからなかった。

マモリはさすがに車の中で鎧をつける訳にもいかず、カットソーとスパッツになっていた。

スタートロイでもらった服の中でこれが一番男に近い格好だったからである。

<ウォーロッセオ・とある場所>

一人で暮らすには充分過ぎる広さだが、大人数が入るには少し狭い空き家の一室。

「例の坊やが町に入ったみたいだね。」

足を組み換え、ボトルの酒をコップにつぎながら話す女がいる。

その狭い部屋には十数人の男たちが棒立ちになり、女の話聞いてる。

「いいかい…しくじるんじゃないよ!」

女は冷たい目をしていたが、その瞳の奥はキラキラとしていた。

「へい!」

そして男たちはぞろぞろと部屋から出て行った。

みな、どこか普通と違う、いかにも野蛮そうな連中だった。

<ウォーロッセオ中心部・闘技場前>

「大きな」

大都市の球場と同じくらいある大きな円形の建物を下から見上げ、マモリは大きな亀みたいだと馬鹿馬鹿しいことを考えていた。

「これは世界中でも有名なウォーロッセオの闘技場よ。週ごとにいろんな大会が行われるの。賞金も出るのよ！だからこの町には腕自慢や賞金目当ての人がたくさん出るの。」

「へえ：ガメイラって本当に何でも知ってるんだね。」

目の前の建物と回りの強そうな人々、それとガメイラの情報が一致しており、マモリはようやくガメイラの知識を信用することにした。

「マモリちゃんも出てみたら？」

「何言ってるんだよ。俺がここに来たのは別の目的が…」

「うふふ、わかってるわよ。ただ今の可愛いマモリちゃんの姿をたくさんの人に見てもらおうチャンスだと思って。」

「…なおさら出る気なくなっただよ。」

そんなたわいもない話を胸のペンダントとしているマモリは、回りからはきつと電波少女だと思われるだろう。

ふと前を見ると、マモリと同じくらいの少女が歩いて来た。

フリフリの可愛いワンプリース。

シヨートボブの金髪。

手には花瓶の様なものを大事そうに抱えている。

「…可愛い…」

ついそう呟いてしまうマモリ。

その少女に見とれてみると、あり得ないことにその少女が突然現れた男に襲われはじめた。

「キヤーーー！」

「ぐへへっ、可愛いなお嬢ちゃん。

お兄さんと一緒に遊ぼうや」

お兄さんと言うにはあまりにも無理のあるその男は、少女の腕を掴み、ひよいつと持ち上げた。

「ええ！？」

そんな馬鹿なと言いたいところだが、現に起こっているのだから仕方ない。

マモリはイージスを召還し、剣と鎧を装備する。

「…おい、その子を話せ！」

あまりにも突如な出来事だったが、日頃魔物に襲われてる人を助けるのが日課のマモリにとっては、日常と変わらない行動である。

その声に男と少女がマモリを見る。

「おお！もう一人可愛い子がいるじゃねえか！今夜は両手に華…！」

まあ手を放さないだろうと思っていたマモリは、男が喋りきる前に動き、剣をふる。

「おおっ！」

男が慌てて手を放す。

少女はその勢いで倒れ、花瓶が割れてしまった。

マモリはまだ用があるのかと言うように、男を睨む。

男は居たたまれなくなり逃げてしまった。

「ふう、大丈夫？」

少女に手を差しのべる。

少女もその手をとり、立ち上がった。

「ありがとう…。でも、花瓶が…」

「え？ああ、ごめん…。大事な物だったの？」

「そういうわけじゃないけど…。う、うう…」

少女は泣き出してしまった。

おろおろと慌て出し、言葉に詰まるマモリ。

「母が病気で、でも病院に行くお金がなくて…。この花瓶を売ればそのお金ができるはずだったの…」

またしてもそんな馬鹿なと言いたい展開だが、少女の涙を見て何も言えなかった。

「…せめて私が大会に出て…賞金を貰えるくらい強かったら…」

泣きながらとんでもないことを言い出す少女。

どう見ても大会に出て闘うなんて無理そうだ。

「このままじゃ…お母さん死んじゃう…」

少女の目から涙がボロボロとこぼれ落ちる。

「わかった…俺が大会に出るよ…。だから泣かないで…」

「…本当？」

まるで少女に丸め込まれたようになってしまったが、マモリは他に泣き止ませる方法が思いつかず大会に出ることを決意してしまった。

「いいの、マモリちゃん？」

「だってしょうがないじゃないか…ほっとく訳にもいかないし、病院の治療費なんて持ってないんだから…」

「マモリちゃん…将来苦労しそうね。」

ガメイラは心からマモリの将来が心配になった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1219y/>

---

フルアーマー・クロスドレス

2011年11月8日03時07分発行